

# 幼児の発達に関する今日的諸問題

平井信義



## 序

子どもを集団的に保育するにあたって、最もマイナスの要因となっていた小児期の重症伝染病の問題が、予防接種法の発見によって、まさに解決されようとしているおり、軽症の伝染病に対しても研究が始まっている現在、新しい問題として登場してきているのは、異常行動を示す子ども問題であろう。

これまでは、異常行動を示す子どもは、保育の外におかれることが多かったが、それらの子どもにも、この世の中に生きる権利があり、同時に、保育を受ける権利があるはずである。その子どもたちも社会の一員であり、社会もまたそれらの子どもを受け入れなければならない。

どのような場において、それらの子どもを教育するのがよい

か、問題は山積しているが、そのいくつかの問題を取り上げて論じてみたい。

## 一、自閉症児とは

現在私が、一生懸命取りくんでいる子どもにも、自閉症児がある。

自閉症児の基本的な問題は、他人との感情的結合を保つ能力に障害があるということである。それゆえ、自閉症児には、友だちとともに遊ぶことに関心がない。また、カリキュラムに沿って保育しようとしても、それが自閉症児の興味にあわなければ園庭にとびだしていったり、ブランコに乗っていたり、園外に逃亡してしまったりする。

子どもは現在、そのような子どもを、ふつうの幼稚園で保育をしていただいている。すなわち、治療教育を行ないながら、友だちを与えた方がよいと思う頃をみはからって、無理をお願いして保育していただいているが、先生方のご努力によって卒業する例がふえており、感謝に堪えない。

自閉症児は、一見、知能がおくれているように見える。たとえば、言語の発達が遅滞しているように見える。呼んでも「はい」という返事をしない。自閉症児が、他人に呼ばれて「はい」と返事をするようになったら、非常によくなったといえるのである。また、紙芝居など見せても、興味がなければ、徘徊し、その一部に興味を示すと、紙芝居の前に立ちふさがってそれを見る。約束を守る気持がない。生活習慣の指導をしても、それのつてこない。こういうわけで、退園を命ぜられてきた子どもがかなりいる。

しばしば、わがままな子どもと間違えられやすいが、そうではない。興味のないことには全く関心を示さない点に、問題がある。

言語の特徴として「呼ばれたら、はいいいませうね」といわれると、「呼ばれたらはいいいいませうね」と、そのままオウム返しにいうなど、種々の特徴がある。

また、人間に興味を示していない時期には、親さえも認識していない。たとえば、遊戯治療を終えて、お母さんが四、五人待っている室に帰ってきても、一番近くにいた女の人の膝にすわってしまうことがある。母親を母親として認識していない。もちろん母と子の対話もない。人間に対する関心を呼びびさまし、人間との情緒的な結合をつけるには、非常な努力がいる。

一方、自閉症児には、ひとつのことに熱中し出すと、すばらしい能力を発揮することがある。たとえば、テレビのコマーシャルを非常に好み、全く正確に覚える。あるいは、天気予報を好めば、県の名前を漢字で覚えてしまう。あるいは、数に興味を持ち、四歳で二桁の分数のたし算、ひき算ができる子どももある。知能を内蔵している子どもが少なくない。その開発は楽しみである。それは、興味をもった対象には夢中になるからである。周囲との関係が遮断されているので、注意を集中することができる。そのため高い能力——特に記憶力のよさを発揮する。

私たちが小学校時代をふり返って見たとき、小学校の勉強はおもしろかっただろうか。幼稚園はどうだっただろうか。小学校時代の記憶で、ほんとうにおもしろかったのは、休み時間と体操の時間くらいだった。それは興味があったからだ。運動能

力は伸びた。しかしその他の授業は、おもしろくなかったものである。いやいややった勉強は能率が悪い。自閉症の子どもは、いやなことには全く手を出さない。

小学校二年で漢和辞典を覚え、あるいは、平方根に興味を持った子どもがいる。そのひとは、現在、六年生であるが、微積分を解いている。それは、興味をもったことに集中した結果である。この子どもは、保育園の頃、何か気に入らないことがあると、部屋をぐるぐるまわったり、激しく泣いたりして、先生を困らせたものである。

## 二、自閉というものをどう考えるか

アメリカの多くの研究では、これを精神病の中に入れていくが、ウィーンのアスベルガー先生は、人間の一面が非常に拡大されてきたのだ、という考え方に立っている。

この考え方は、問題児に対する考え方に関連してくると思う。

自閉症という極端な異常を示す子どものお話をしてきたが、これも、正常児との関連で考えることができる。その点で保育者の中には、自分の扱いにくい子どもをすぐに、異常児としてし

まうというようなことはないだろうか。両親にはその傾向がいっそうつよい。両親が「問題児だ」と見ている子どもが、保育者からみて、少しも問題児ではないことがある。

その逆もある。これには両親の児童観が、非常に大きく影響している。保育者の間でも同様なことがある。A先生は問題児としていた子どもが、B先生から見れば、そうでないといったことがおこる。

最もむずかしい自閉症児の基本的な問題は何か？さらに、アスベルガー先生の考え方を述べてみよう。

先生の考え方によると、人間には二つの面がある。ひとつは、社会の流れに従って行動する面、これが社会的適応である。人間のもうひとつの面として、社会から自己を遮断し、個人の内面生活を深めていくという大切な営みがある。社会的適応のみが強く要求されると、この面が忘れられる。そのために、自閉症児は、逆に、自己を社会から遮断する面が強い。非常に異常児と考えられてしまうが、しかし、自分の内面生活を深めている点を考えなければならない。

正常の子どもにもこの面を育てていく必要がある。

自閉症児と生活していると、われわれが教えられる面が、大いにある。社会的適応の面のみを考えていると、人間の大切な

面を忘れてしまいがちである。一般的にいえば、毎日の生活が何ごともなく終わってくれば、満足する保育者や母親が多い。ところが自閉症児は興味に集中するあまり、それを破壊する結果となる。母親と子ども、保育者と子どもは、すっかり行き違ってしまうのである。それゆえ、自閉症児の治療にあたっては、同時に、お母さんの受け入れ方をかえるとともに、子どもの見方、考え方をかえる必要がある。

子どもは毎年、引込み思案の子どもを集めて、一週間の合宿を試みているが、そこでは子どもは、自分のしたいことを思う存分にさせてもらえる。いたずらも一緒にやってやる。

するとそのなかから、自発的に創造的な意欲を示すようになる。それが、親や保育者から与えられた小さな「よい子」のわくをはずすのに役立つ。自分からくふうしたり、自分で決定したりする能力が開発される。その時に、自分で見つけたものには、熱中し、よい能力を発揮する。それを見てみると、われわれは、人間のあり方の一面を教えられる。

これからは、個々の子どもの認識が、今まで以上に必要になる。個人差というのは、人生が決定した瞬間からはじまっている。現在は、妊娠中やお産のときの故障ということだけに研究が集中しているが、将来は、もっともっと個々の子どもに対す

る認識への研究が、高まっていくだろうと思われる。みなさんも、これから、ひとりひとりの子どもを、よく見つめ、行なってほしい。

もう一度、自閉症児の問題に帰ろう。自閉症児は、自分の興味にあったことには非常に集中するという面が、高い知的能力を育てている。その結果大学の先生や芸術家になっている者がふえている。

しかし、問題は、社会的適応にある。社会的適応が困難であるために、世の中からとり残されてしまいがちである。自閉性という面が、人間の中のひとつの要素として考えられれば、それを認めながら、社会がそれを受け入れる対策を立てる必要がないだろうか。

ある自閉症児は、言語をほとんど発しないし、友だちをつくる気持は少ないが、今、一心に、はり絵をしている。これは、一年間、児童画の先生がその子と接触して開発して下さった能力なのである。その上で、少しでも友だちと接触する力を与えたい。こういう子どもに接すると、子どもというのは、無限の可能性を持っている存在であり、それを見つけて開発するという実践に努力しなければならない。もし教育をあきらめたならば、子どもは伸びる力を失ってしまう。自閉症児を扱ってみ

て、そのことをしみじみ思う。

また、自閉症児を熱心に保育してくださっている保育者に接すると、その保育者の人格に打たれる。保育者自身も、このような子どもの保育に努力していくなかに、非常にゆたかな、バーソナリティーに変化してくる。児童観が変わるのである。

### 三、神経質ということから

「神経質」といえば、生まれつきとか、遺伝と考える人が少ない。保育をしている子どもの中にも、神経質な子どもがいることと思う。われわれが母親を対象に調査してみると、自分の子どもを神経質だと思って、いろいろな徴候をあげている親は、自分自身を神経質と思っているものが多く、その相関は、非常に高い。そうなると、神経質は親から遺伝しているように見えるが、実は、神経質な親に育てられるということが、影響していることを考えなければならぬのである。

私どもは、引込み思案の子どもとともに、神経質といわれる子どもを、親から離して、一週間ほど合宿をしている。一年保育の子どもから、小学校五、六年までの子ども六十名前後を集めて行なうのである。合宿の間、私どもは、子どもが何をして

も、いつさい叱らない。その中で、子どもは、自発的に行動できるし、いろいろな機会を通じて勇気づけられる。その結果、神経質な面を、全く捨て去ってしまう子どもがでてくる。神経質には、親や先生方の「思い込み」からきたものが多いし、その「思い込み」が子どもに影響していることが多い。

特に「引込み思案」などは、環境の要因が、非常に大きい。私どもは、次の三つの類型にわけて、引込み思案というものを検討している。ひとつは、実は引込み思案のように見えているが、そうではないもの。たとえば、自閉症児とはちがうが、自分のことに熱中していて、集団活動に誘ってみても応じることの少ない子ども。これは、引込み思案ではない。こういう子のなかには、ひとりっ子など、自分ひとりの生活に慣れてしまっていたり、「興味限局児」という状態にあるものもある。

第二には、全く過保護の中で育ってきた子どもである。こういう子は、生活習慣が自立していない。年寄りのいる家庭に多い。子どもに依存的な気持が少なくなると、他の子どもと遊ぶことが始まる。

第三には、「よい子のわく」を押しつけられてきた子ども。たとえば、「お友だちとけんかしちゃいけない」といわれている子どもは、友だちと遊べなくなってしまう。子どものけんかと

いうのは、子どもの力が充実しはじめるときかんになる。その時期をくり返しながら発達していくものである。

したがってけんかをしながら、それがよく指導されることが必要で、その結果、じょうずなけんかを学習する。人生にはいくつもけんかの場がある。けんか(たとえば議論)はするが、相手を憎まない——つまり、相手の立場をよく考えながら、自分の考え方を主張することのできるようにけんかを指導する必要がある。最近、幼稚園であまりけんかがない、と聞くことがあるが、それは子どもの社会性が発達したことにはならない。

子どもの発達を無視した親の要求のわくの生活の中で生活している子どもが、引込み思案という形をとる。このような子どもは、生活習慣の自立はよくできている。

合宿につれていった、ある一年保育の子があった。生活習慣は身につけているのだが、集団にはいれない。皆のすることをわきから見ていて、批評がましいことをいうのだが、友人の中にはいっていけないのである。一年保育の子どもたちは、夕方になるとさびしくなって、泣きだしたり、「ママのところへ帰りたい」といったりするのです。私も、おんぶやだっこをして皮膚接触を保つのだが、その時に、その子どもは、「先生、東京の方角はどちらですか?」としつこく聞いた。つまり、お

母さんから「先生にご迷惑のかかることをしないように、さびしくなっても、がまんするのですよ」といわれてきているのである。私の胸にうずまったとき、はじめて子どもらしい感情ができてきて、涙を流したのである。それ以来、よい子のわくがはずれ、友だちと遊べるようになった。

子どもは、いたずらをする存在である。ところが母親や保育者とお話ししていると、保育者自身いたずらをした経験が少ないのを感じることがある。女性には、幼い頃からいろいろなわくが与えられてはいなかったろうか。われわれ男性は、ずいぶんいたずらをしてきたものである。それを、私どもの合宿では、実現させる。たとえば、合宿のおふろでは、もぐりっこ、ひっかかけっこなどをさかんにする。こういうような経験は、母親自身においても非常に少ない。母親はもちろん、保育者の中にも、自分の狭いわく(児童観)から子どもの行動をみて、そのわくから少しでもはみだした子どもは、どうしても理解できなくなることはなからうか。

#### 四 子どもの発達と個人差について

以上のことは、子どもの身体発育についてもいえる。子ども

のからだは、大きければよいから、だといってもよいかどうか。「子どもを大きくすることに、意味があるか」ということである。大きく育つ子には、思春期が早くくる。

子どもが調査の対象にしている学校の子どもは、だいたい六年生で六割、五年生で二割、四年生でほぼつ、初潮がみられる。昨年大阪府で調査されたところによると、三年生で初潮のある子どもが何人かある。一八三〇年頃は、初潮の平均は十七歳だった。(スエーデンの研究)今の子どもは平均は十二歳台であるから、一三〇〇年で、初潮の平均年齢は五年も早くなったことになる。あと五〇年もすると、早い子どもは幼稚園で初潮を経験するということになりかねない。

からだの大きい子どもに初潮が早いから、「大きくなれ」というのは、「思春期よ早くこい」ということを意味していることにもなる。大きく育てることが、はたして本当によいことなのか疑問になってくる。

なぜ子どもたちが大きくなってきているのか。ひとつには栄養説がある。もうひとつの見方には、精神説があり、これには二つの考え方があつた。ひとつは解放説というもので、二十世紀になってから、子どもはおとなを縮小したものでない、という考え方がでてきて、子どもが精神的に解放され、それが身体発

育を向上させたと考える考え方である。

また一方、栄養条件は少しも変わらないのに都会の子どもが、地方の子どもに比べて、身長、体重、胸囲とも大きいということ(オランダ、デンマークなど)から都会に独得の好ましくない影響因子が子どもに及んで、発育を向上させているのではないかという仮説がたてられた。

都会の好ましくない影響として、騒音、交通事情、光線などがあげられている。都会の親が、子どもに毎朝、「きをつけてね」というのは、「死なないでちょうだい」ということを意味しているくらいに、都会の子どもは、緊張感をもって道路を横断している。あるいは、昼をあざむくばかりの夜の光線、そういう都会の生活が、子どもの成長ホルモンをだす脳下垂体に、何か影響を与えているのではないか、という研究がされている。

したがって大きいということ、価値があるということを、すぐに結びつけることはできないのだ、と申しあげたい。

身長、体重ともに、平均より下にある子どもに対して「もっと大きくならなければだめですよ」というべきか「あなたはあなたなりの発育をしていて、よいですよ」といってあげるか。

私は、栄養の条件が満たされており、衛生的な欠陥がなく、運動のできるような家庭にいれば、小さくてもよし、やせていて

もよし、また太っていてもよし、といたい。

ところが、大きく育っている子どもは、何となしに育てがいがあるように感ぜられるものである。それは発育観が狭いためにおこる。身体発育についても性格についても、それが果たして価値があるかどうかは、いろいろの角度から検討しなければならぬことがわかりただけたと思う。

特に注意したいのは、やせている子ども、小さい子どもに劣等感をいだかせないような保育である。その点で、長期にわたって子どもの発育を観察していくと小さい小さいといわれていた子が、急に大きくなることがある。

私のあつかってきた例の中で、十五歳のときに一八センチ伸びた女の子がある。幼児期、学童期を通じて、クラスで一番小さかった。また男の子でも十七歳まで小さくて、しかも生殖器の発育も子どもと同じであったのが、その後どんどん発育して、二十二歳で、完全にりっぱな男子になったという報告もある。思春期は変化の著しい時期で、思春期に身体も変わり、性格も変わるということがよくおきる。したがって、幼児期において、発育がよいか悪いかの評価はなかなか下せない。

また、おすもうさんを正常な発育とするか異常な発育とするかについて、私どもの間でもよく討論することだが、みなさん

は、どうお考えになるだろうか。

一方、精神発達にも個人差がある。非常におもしろいのは、ゲゼルがすでにいっているように、特に情緒の発達はスパイラル(螺旋状)であるということである。

情緒がはげしく表現されるときと、安定しているときとが、交互に現われる。その際、子どもの激しく現われる面ばかりをみて、問題児とすることがあれば、これは誤っている。むしろ、子どものよい面をつづっていくことが、子どもを進歩させる原動力となる。

子どもを評価する際には、その一面だけをみないで、全面的に、しかも、根気よく経過を追って、検討することが必要となる。

まだまだ、子どもの本当の心やからだを知るための研究は、たくさん残っている。子どもは、未知の要素をたくさんに秘めている存在である。それを掘りおこしていく楽しみが、みなさんのなかにあり、また非常に大切なお仕事であると思う。

私は近日中にまた、子どもたちと一緒に、合宿をする。具体的な接触の中から、子どもから教えられるものがたくさんにある。その楽しみはいいつくせない。

(日本幼稚園協会主催幼児教育講習会での講演より)